補遺　スンバワ語とマレー語の他動詞構文の比較

第 10 章「総括」で、スンバワ語の統語的特徴の一つとして「態」のシステムの単純さを挙げた。これは、近隣の同系統（オーストロネシア語族、西マレヨ・ポリネシア語派）の言語である西部インドネシア諸語とスンバワ語を大きく分ける特徴である。ここでは西部インドネシア諸語のうちマレー語をとりあげ、スンバワ語と比較することによって、この点を明らかにする[1]。ここでマレー語について述べることは、バリ語、ジャワ語、スンダ語にもほぼあてはまる。

他動詞構文の統語的特徴に関してマレー語は多様な方言的変異を示すが[2]、ここでは Sneddon (1996:246-250)の記述に従う。（ただし、例文はここでの論旨に合わせて作者が作例したものである。マレー語の例文に関しては、インドネシア語の正書法に沿う形で文頭に大文字を用いる。）

まず、マレー語の他動詞構文について述べる。マレー語では、他動詞構文として動詞の基本形が用いられる構文と、動詞に*meN-*という接辞が付いた形[3]（以下*meN*形と呼ぶ）が用いられる構文の二種類がある。多くの場合、動作主を表す要素と動作の対象を表す要素は両方とも名詞句補語の形で現れ、各補語と動詞の意味的関係は、語順によって示される。

(1)(2)は基本形の構文の例である。この場合動作主を表す補語は常に動詞に直接先行する。動作の対象を表す補語は(1)のように動詞に先行しても(2)のように後続してもよい。（語順が固定している箇所を[ ]で囲んで示す。）

(1)　*orang*　*itu*　[*saya*　*tunggu*].
　　person　that　1SG　wait
　　「その人は私が待つ。」
　　「その人を私は待つ。」

(2)　[*Saya*　*tunggu*]　*orang*　*itu.*
　　1SG　see　person　that
　　「その人は私が待つ。」
　　「その人を私は待つ。」

1　マレー語はインドネシア、スマトラ島土着の言語であるが、周辺の海域で広く地域共通語として用いられてきた言語で、インドネシア国語の基盤となっている言語である。（マレー語、インドネシア語については第 1 章 3.1 で触れた。）スンバワ語話者のほとんどが第二言語としてインドネシア語を話し、スンバワ語には語彙などの面でインドネシア語の影響がみられるが、この項で扱う、動詞を含む構文に関しては、マレー語のスンバワ語への影響は観察されていない。

2　スンバワにおけるマレー語の変種の一例を第 1 章(3.1)の註 4 に示した。

3　Nは原則として語基の最初の音と調音位置が同じ鼻音として現れる。

(3)(4)は *meN* 形の構文の例である。この場合、動作の対象を表す補語が常に動詞に直接後続する。動作主を表す補語は(3)のように動詞に先行しても、(4)のように後続してもよい。（この場合も、語順が固定している箇所を[ ]で囲んで示す。）

(3)　*Saya*　[*menunggu*　*orang*　*itu*].
　　1SG　meN-wait　person　that
　　「私はその人を待つ。」
　　「私がその人を待つ。」

(4)　[*Menunggu*　*orang*　*itu*]　*saya*.
　　meN-wait　person　that　1SG
　　「私はその人を待つ。」
　　「私がその人を待つ。」

大ざっぱに言うと、(1)(2)の基本形の構文は動作の対象が話題や談話の焦点など、情報構造の上で切り離されている場合に用いられ、(3)(4)の *meN* 形の構文は動作主が話題や談話の焦点など、情報構造の上で他の部分と切り離されている場合に用いられる。（(1)-(4)ではそのような対立を日本語訳に反映させた。）

このような特徴から、(1)(2)の基本形の構文は多くの言語で受動態として扱われる構文に、(3)(4)の*meN*形の構文は多くの言語で能動態として扱われる構文に類似した意味的・談話的特徴を持つといえる。Sneddon(1996:247)はそれぞれの構文が、英語等において受動態、能動態と呼ばれるものと機能上異なる点を持つことを認めた上で[4]、基本形の構文を受動態、*meN* 形の構文を能動態と呼び、前者（(1)(2)のような文）においては動作の対象を表す要素を主語、後者（(3)(4)のような文）においては動作主を表す要素を主語として扱っている。以下の記述では便宜上このSneddonの術語を採用することにする。

上記の態の対立は、それぞれが形成する名詞節の表す意味（より正確には、動詞の表す状況との意味関係）を表し分ける機能も担っている。つまり、能動態と受動態、いずれの構文が用いられるかによって、それぞれが形成する名詞節全体の表す意味が異なる。

マレー語では、名詞節はスンバワ語の *adè*(第５章 8.1)とほぼ同様の機能を持つ名詞節形成詞 *yang* によって形成される。*yang* が(1)(2)の基本形の構文を名詞節化する場合、名詞節は動作の対象を表し、(3)(4)の *meN* 形の構文を名詞節化する場合、名詞節は動作主を表す。

4　(1)(2)の構文を「受動態」、(3)(4)の構文を「能動態」と呼ぶのが問題である理由の一つとして、(1)(2)の構文が動詞の形態の点からは「基本的」であるという事実がある。柴谷(2002:36)は、バリ語の態のシステムに関して同様の点に注目し、このようなシステムを、複数の態のうち、いずれが有標であるのか明確である言語（日本語や英語などの対格言語、ジルバル語などの能格言語）と対立するものとして、流動的ヴォイス体系と呼んでいる。

(5)　*yang*　*saya*　*tunggu*.
NOM　1SG　wait
「私が待つ者」

(6)　*yang*　*menunggu*　*orang*　*itu*.
NOM　meN-wait　person　that
「その人を待つ者」

以上、マレー語の態のシステムについて述べてきた。スンバワ語はマレー語のように複数の他動詞構文を持たない。他動詞構文として扱うことができるのは、動詞の基本形の構文一種類だけである。マレー語の二つの構文によって表し分けられるような意味的・談話的違いは、スンバワ語では語順によってある程度表し分けられる。マレー語の受動態のように、動作の対象が話題として表される場合は(7)のように、述部の前に動作の対象を表す要素が現れる。一方、能動態のように、動作主を話題として表す場合は、(8)のように述部の前に動作主を表す要素が現れる。（(7)(8)ではそのような内容を日本語訳に反映させた。）

(7)　*tau=nan*　*ku=tari*　*léng*　*aku*.
person=that　1SG.LOW.AFFIX=wait　by　1SG.LOW
「その人は私が待つ。」
「その人を私は待つ。」

(8)　*aku*　*ku=tari*　*tau=nan*.
1SG.LOW　1SG.LOW.AFFIX=wait　person=that
「私はその人を待つ。」
「私がその人を待つ。」

また、それぞれの要素が談話の焦点として扱われる場合は、叙法辞が補語の後に現れる。ここでは補語の後に不確定を表す叙法辞 *ké'*が現れる例を挙げる。

'(7)'　*tau=nan*　*ké'*　*mu=tari*?　*léng*　*kau*
person=that　INTERR　2SG.LOW.AFFIX=wait　by　2SG.LOW
「その人をあなたは待っているのですか。」

(8)　*Nya=Amén*　*ké'*　*tari*　*tau=nan*?
TITLE=Amin　INTERR　CONS=1SG.LOW.AFFIX=wait　person=that
「その人を待っているのはアミンですか。」

また、名詞節に関しては次のことがいえる。第５章の 8.1 で述べたように、スンバワ語の

名詞節形成詞 *adè* が他動詞構文に先行する場合、形成された名詞節は(9)のように動作主を表す場合もあれば、(10)のように動作の対象を表す場合もある。（いずれの場合も動詞の形態変化はみられない。）

(9)　*adè*　*tari*　*tau=nan*
　　NOM　wait　person=that　「その人を待つ者」（動作主を表す）

(10)　*adè*　*ku=tari*
　　NOM　1SG.LOW.AFFIX=wait　「私が待つ者」（動作の対象を表す）

4.2.1.2 で述べたように、マレー語の接頭辞 *meN-*は、歴史的にはスンバワ語の鼻音接頭辞 *N-*に対応する。しかし、マレー語の *meN* 形動詞が、動作主を表す要素、動作の対象を表す要素の両方と共起しうるのに対して、スンバワ語の鼻音接頭辞の付いた形は自動詞であり、動作主を表す要素としか共起しない。鼻音接頭辞 *N-*についての詳細は第４章 2.1.2 で詳しく述べた。ここではそこで挙げた例を再掲する。

(11)(=(4-13))は基本形の他動詞 *inóm* の文である。他動詞 *inóm* を含む述部は動作主を表す語、動作の対象を表す語両方と共起している。

(11)　*ya=ku=inóm*　*kawa=nan*　*léng*　*aku.*
　　CONS=1SG.LOW.AFFIX=drink　coffee=that　by　1SG.LOW
　　「私はコーヒーを飲むことにする。」

一方、(12)(=(4-14))は他動詞 *inóm* を語基とする鼻音接頭辞 N-の付接した動詞 *nginóm* の文である。この動詞は潜在的に動作の対象を持つ動作を表すが、これを含む述部は動作の対象に相当する語と共起することはない。

(12)　*ya=ku=nginóm.*
　　CONS=1SG.LOW.AFFIX=drink
　　「私は何か飲むことにする。」

たとえば，上記(12)の自動詞 *nginóm*「飲む」の文に，飲む対象を表す要素が現れることはない。動作の対象を表す(と解釈されるような)名詞句が *nginóm* と共起している(13)(=(4-15))のような文は容認されない。

(13)　**ya=ku=nginóm*　*kawa=ta*
　　CONS=1SG.LOW.AFFIX=drink　coffee=this
　　（期待される意味）「私はこのコーヒーを飲むことにする。」

さらに、マレー語には態にかかわる接辞として、いわゆるアプリカティブの接辞と呼ばれる接尾辞*-i* と*-kan* がある。（いずれも逐語訳では APPL と付した。）この接辞は他動詞に付

接し、語基の他動詞構文と意味的・統語的機能が異なる他動詞を派生する。

具体的には、語基の動詞の構文では前置詞句補語によって表されている「周辺的要素」（場所、受益者などを表す要素）が、派生形の構文では名詞句補語の形で表される。さらに、その補語は受動態の構文における主語として機能する。

接尾辞接尾辞-*i* が付いた動詞（以下 *i* 形動詞）も-*kan* がついた動詞（以下 *kan* 形動詞）も一般の他動詞同様、能動態、受動態の両方の構文に現れる。ただし、以下の例では、「周辺的要素」が主語として扱われる受動態の構文の例を挙げる。

まず、*i* 形動詞の構文について述べる。接尾辞-*i* は、多くの場合「もののやりとり」や「場所へのはたらきかけ」を表す動詞に付接し、何らかの形である対象に間接的な影響を及ぼす状況を表す動詞を派生する。

(14)(15)はもののやりとりを表す他動詞 *kirim*「送る」の例である。

(14)は語基の他動詞の文である。ここでは「やりとりされるもの」である「手紙」を表す要素 *surat itu* が名詞句補語の形で、「やりとりの相手」である「アリ」を表す要素 *Ali* が前置詞句補語の形で現れている。

(14)　*Surat*　*itu*　*saya*　*kirim*　*kepada*　*Ali*.
　　letter　that　1SG　send　to　Ali.
　　「その手紙を私がアリに送る。」

一方、(15)は対応する *i* 形動詞の例である。ここでは「やりとりの相手」を表す要素 *Ali* は名詞句補語の形で現れている。

(15)　*Ali*　*saya*　*kirim-i*　*surat=nya*.
　　Ali　1SG　send-APPL　letter=the
　　「アリに私はその手紙を送る。」

(15)に示したように、*i* 形動詞の構文では動作主、やりとりされるもの、やりとりの相手をそれぞれ表す要素がいずれも名詞句補語の形で現れるが、このうち述部の前後両方に現れうるのは、やりとりの相手を表す補語のみである。(16)のようにやりとりされるものを表す要素が述部の前に現れている例は容認されない。

(16)　**Surat=nya*　*saya*　*kirim-i*　*Ali*.
　　letter=the　1SG　send-APPL　Ali
　　（期待される意味）「アリに私はその手紙を送る。」

よって、この種の構文においてはやりとりの相手を表す要素 *Ali* が主語であると考えられる。

次に「場所へのはたらきかけ」を表す動詞 *tanam*「植える」の例を示す。(17)は語基の他

動詞の文である。ここでは「植えられるもの」である「その稲」を表す要素 *padi=nya* が主語として現れ、「植える場所」を表す要素である *sawah=nya*「その水田」が前置詞句補語の形で現れている。

(17)　*Padi=nya*　*saya*　*tanam*　*di*　*sawah=nya.*
rice=the　1SG　plant　at　ricefield=the
「私は水田に稲を植える。」

一方、(18)は *i* 形動詞の例である。ここでは植える場所を表す要素 *sawah=nya*「その水田」が主語として、「植えられるもの」を表す要素 *padi*「稲」が前置詞句補語の形で現れている。

(18)　*Sawah=nya*　*saya*　*tanam-i*　*dengan*　*padi.*
ricefield-the　1SG　plant-APPL　with　rice
「私は水田に稲を植える。」

次にもう一つのアプリカティブの接辞-*kan*の付いた動詞（*kan*形）の構文の例を見る。この接辞は、語基が、他動詞である場合は（多くの場合）授・受益を表す動詞を形成する[5]。

(19)(20)は *tanam*「植える」の例である。

(19)は語基の他動詞の文である。ここでは「植えられるもの」である「稲」を表す要素 *padi* が主語として、「その動作による受益者」を表す要素である *Ali* が前置詞句補語の形で現れている。一方、(20)は *kan* 形動詞の例である。ここでは「受益者」を表す要素 *Ali* が名詞句補語の形で現れている。

(19)　*Padi=nya*　*saya*　*tanam*　*untuk*　*Ali.*
rice=the　1SG　plant　for.benefit.of　Ali
「私はアリのためにその稲を植える。」

(20)　*Ali*　*saya*　*tanam-kan*　*padi.*
Ali　1SG　plant-APPL　rice
「私はアリのためにその稲を植える。」

(20)に示したように、*kan* 形の構文では動作主、動作の対象、受益者をそれぞれ表す要素がいずれも名詞句補語の形で現れるが、このうち述部の前後両方に現れうるのは、原則として受益者を表す補語のみである。(21)のようにやりとりされるものが述部の前に現れている例は容認されない。

(21)　**padi=nya*　*saya*　*tanam-kan*　*Ali.*
rice=the　1SG　plant-APPL　Ali
（期待される意味）「私はアリのためにその稲を植える。」

よって、この種の構文において、他動詞の基本形の文における動作の対象を表す要素に

5　この接辞は語基が自動詞である場合は、使役接辞として機能する。このことから、この接辞の一次的機能は「項を増やす」ことであると考えられる。

対応するのはやりとりの相手を表す要素であるといえる。

ここまでマレー語のアプリカティブの接辞*-i* および*-kan* の付いた動詞の構文の例をみてきた。これらの接辞形の文では、語基の動詞の文では前置詞句補語として現れる要素が主語としての扱いを受ける。これらの接辞形の文は、基本形の文において「周辺的要素」として扱われる「もののやりとりの相手」「間接的な影響を受ける場所」「受益者」などの要素が、当該の文による伝達においては、主題や焦点など、特別な談話的位置づけを与えられていることを示す機能を持つといえる。

一般的な他動詞構文と同様、アプリカティブの接辞が付いた動詞の構文も、名詞節を形成する際は、全体でその構文の主語に相当する意味を表す。よって、(15)(18)のような *i* 形の動詞の構文が名詞節を形成する場合、名詞節は全体で「もののやりとりの相手」「間接的な影響を受ける場所」を表す。(22)(23)にそれぞれ例を示す。

(22)　*yang*　*saya*　*kirim-i*　*surat*.
NOM　1SG　send-APPL　letter
「私が手紙を送る人（相手の人）」

(23)　*yang*　*saya*　*tanam-i*　*padi*
NOM　1SG　plant-APPL　rice
「私が稲を植える場所」

また、(20)のような *kan* 形の動詞の構文が名詞節を形成する場合、名詞節は全体で受益者を表す。(24)に例を示す。

(24)　*yang*　*saya*　*tanam-kan*　*padi*
NOM　1SG　plant-APPL　rice
「私が稲を植えてあげる人」

スンバワ語にはマレー語のアプリカティブの接辞に相当する接辞はなく、他動詞構文において前置詞句補語で現れる要素を主語として取り扱うような態の転換は存在しない。ただし、マレー語のアプリカティブの構文で主語が表す「周辺的要素」（「物のやりとりの相手」「間接的な影響を受ける場所」「受益者」）のうち、「もののやり取りの相手」を表す要素は、名詞節形成の際に動作主を表す要素、動作の対象を表す要素などと同様、「中心的」要素として扱われうる。第５章の 8.2 で示したように、「もののやりとり」を表す他動詞の文が名詞節を形成する場合、その名詞節は「もののやりとりの相手」を表しうる。

(25)　*adè*　*ku=sempét*　*lamong=nan*
NOM　1SG.LOW.AFFIX=send　clothes=that
「私がその服を送った人」

以上述べてきたことをまとめると以下のようになる。

マレー語には二種類の他動詞構文が存在し、それぞれ多くの言語において「能動態」「受動態」と呼ばれる構文に対応するような機能を持つ。また、マレー語にはいわゆるアプリカティブの接辞が存在する。その接辞が付いた動詞の構文においては、語基の他動詞の構文において「周辺的要素」として（前置詞句補語の形で）扱われている要素が動作の対象と同様の「中心的な要素」として扱われ、受動態の構文における主語としての扱いを受ける。上記二つの手段によって、マレー語の他動詞構文においては、「動作主」「動作の対象」の他に「もののやりとりの相手」「間接的な影響を受ける場所」「受益者」など多くの（動詞との）意味的関係を表す要素が主語として現れうる。

一方、スンバワ語では他動詞構文は一種類しか存在しない

上述したように、マレー語の「態」の転換の機能の一つに、補語の指示物の意味的・談話的地位（主題、焦点など）を表し分ける機能がある。マレー語のような「態」のシステムを欠くスンバワ語においては、語順（補語を述部の前に置くこと）がある程度この種の機能を担っていると考えられる。

また、マレー語の「態」の転換の機能として、もう一つ、他動詞構文が名詞節化された場合、その名詞節全体が表す（動詞との）意味関係を明示する機能がある。

上述したように、スンバワ語の他動詞構文から成る名詞節は、態の変化を伴わず、動作主、動作の対象、もののやりとりの相手の三者を表しうる。このことは、スンバワ語の「態」のシステムの欠如をある程度補っているといえるだろう。